世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

梅若派謡本刊行者「小 梅洲」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 葉子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/811

梅若派謡本刊行者「小　梅洲」

高橋葉子

昨年度の『能楽資料センター紀要』（28号）所載の拙稿「謡本から見た梅若家と観世喜之家―近代観世流の節付改革」において筆者は、近代に出版された初めての直シ入り謡本として、明治一八（一八八五）年刊行の梅若派の謡本を紹介した。[1] 本稿は、その際不明とした刊行者「小　梅洲」について、その後に判明した資料を紹介し補説するものである。

文献の引用にあたっては、漢字旧字体を新字体に変えるなど変更を加えた部分があることを断りおく。また文中の年齢は全て数え年である。

一、初世梅若実門人、小川勘助

明治一八年一一月に刊行された梅若派謡本は、近代初の直シ入り謡本であり、以後の節付改革の嚆矢となった本である。前稿と重複するが簡単に紹介したい。奥書は次のとおりである。

右之本者有志諸君之依頼により百部限り令集冊畢
明治一八年一一月　小　梅洲（朱印「寶川居士」）筆
写　梅若馥

すなわちこの謡本は、「小　梅洲」（以下梅洲）を名乗る

人物が、有志の声にこたえ、梅若の分家の一である七郎兵衛薫家の長、梅若薫（馥・馨）の執筆を仰いで謡本を製作し、限定出版したもので、内外別二百番に神歌・仲光・梅を加えた揃本である。節付が詳細な上、まとまった謡本としては初めての石版印刷（印刷所は大山周三）により版面が鮮明で美しく「当時のものとしては質的に卓越した謡本」（表章『鴻山文庫本の研究―謡本の部』[2]）と評価される本である。丸岡桂は、「観世流謡本出版年譜[3]」において、「明治に入りて直し入本の出版せられたる嚆矢にて又石版刷謡本の嚆矢なり」「節付は梅若実の原本に由りたり」としたうえで、奥付には百部限りとあるが、「故観世清之（謡本刊行時の梅若家当主、五三世梅若六郎）の談によれば実際は二百部印刷したる由」としている。丸岡と清之の関係から考えて、この情報は信じてよいだろう。

執筆者の梅若薫は本名を中川学三郎といい、書家中川憲斎[4]の次男で、安政四（一八五七）年に七郎兵衛薫家に養子に入った。大正三（一九一四）年に七七才で没したとされているから、養子に入ったのは二〇才、右の謡本出版時は四八才である。書家の息子らしく能筆であったとみえ、宮中への献上謡本を執筆したこと、謡に秀でて地謡に重用され、初世実の信頼を得ていたことなどを、『梅若実日記[5]』（以下『日記』）等の諸資料から知ることができた。一方、刊行者である梅洲については、梅若一門の人物であることが推測される以外は不明であり[6]、筆者は「宗家の手前、表立つことを避けた清之（六郎）自身であるという可能性はないだろうか」などと、見当はずれの推測をしたのだった。

しかしその後筆者は、初代梅若実資料研究会が翻刻紹介した「梅若六郎家蔵『門入性名年月扣』翻刻および人名解説[7]」（以下「人名解説」）に番号籍３２３として立項されている小川勘助が、ほかならぬ梅洲その人であることに気が付いた。後述するように小川勘助は初世実から謡の免状をいくつも伝授されているので、同研究会によって翻刻紹介された、梅若家蔵の別の資料『伝授免状扣[8]』にもその名を認めることができる。

まず「人名解説」の当該項目を左に転載しよう。最初の太字部分が『門入性名年月扣』の記事の翻刻で、冒頭

の「同廿五日」とは明治一五（一八八二）年五月二五日のことである。続く①以降が同研究会のまとめた解説部分であり、番号の内容は以下の通りである。①氏名など、②生没年など、③経歴、社会的立場など、④能楽・梅若関係の事柄、⑤所属していた能の稽古団体、⑥参考文献。

資料1　「梅若六郎家蔵『門入性名年月扣』翻刻および人名解説」

同廿五日　同十六年五月勧進帳ヲ伝授致ス

茅場町四番地　小川勘助　重昌　宝川

①鈴木氏。小川氏。名、勘助・勘介・重昌・宝川・宝僊。②元治2（1865）年2月20日生、没年未詳。③鈴木善助の長男として東京に生まれる。小川氏を嗣ぎ、日本橋区南茅場町4丁目にて染料品商を営む。押上町468番に別荘。④明治17（1884）年4月、門人らによる初代実の病気見舞催において発起人をつとめ、当日出席。18年頃から横浜連中の稽古にもしばしば参加。20年頃まで稽古を受け、謡〈勧進帳〉〈砧〉〈神歌〉〈恋重荷〉〈卒都婆小町〉〈望月〉〈道成寺〉などを伝授された。34年には〈玉取〉〈起請文〉を許され、また紛失した〈勧進帳〉ほか6曲の免状再発行を受けている。⑤鞍馬会・愛宕会・横浜養心会。⑥日記・明治人名

⑥に参考文献として挙がっている「日記」とは『梅若実日記』、「明治人名」とは一九一一年刊行の『現代人名辞典』を後に複製した『明治人名辞典』[9]のことである。同辞典の小川勘助の項目は左の**資料2**の通りで、分量的には僅かであるが、勘助の出自に関する基本情報が提供されている。

資料2　『明治人名辞典』

小川勘助君　君は東京の人、鈴木善助氏の長男、慶応元年二月二十日の出生にして、後小川氏を襲ぎ、染料品商を営む（日本橋区南茅場町四電話長浪花一五六二）

資料1の解説部分（①から⑤）は、『日記』からの情報に**資料2**の情報を加えてまとめたものである。『日記』をたどって見ると、明治一五年五月二五日の条に確かに「小川勘助門入」と書かれており、その後勘助が複数の謡会に熱心に出席し、次々に習物の伝授を受けている記録を見ることができる。その中に謡本奥書の落款と同じ「宝川」の名も確認することができる。元治二年（慶応元年）の生れであるから一八才での入門である。

しかし以上の資料には「梅洲」の名は見当たらない。小川勘助が梅洲であると判明したきっかけは、たまたま別件の調査において三浦裕子氏からご教示（二〇一七年九月）いただいた、『謡曲名家列伝』[10]（以下『列伝』）という本であった。大正三年刊のその本において、小川金太郎[11]という人物が梅洲の息子として紹介されており、梅洲の姓が小川であることがわかったのである。さらに、金太郎は昭和二年刊の『現代音楽大観』[12]（以下『大観』）にも立項されており、その記事によって小川家の通り名が勘助であると判明し、小川梅洲と小川勘助が繋がったのである。以下、『列伝』と『大観』から小川金太郎の項目を見てみよう。

二、『謡曲名家列伝』と『現代音楽大観』

二つの資料はどちらも長大なので適宜省略して転載した。……は省略の印。傍線は筆者による。

資料3　『謡曲名家列伝』

小川金太郎　観世流　日本橋区南茅場町

……氏の家は世々海産物問屋を業とし、黽勉以って其実を修め、富裕の聞あり。……されば氏の祖父の頃より身学芸に志し、人の乏しきを憐み、親戚故旧に宜し。其子梅洲亦之を承く、謡曲の事は、祖父観世流を習って略其技に通ず、梅洲の代、明治維新の後に際して、……謡曲の如きは、殆んど顧るの人なかりき。されば能楽の大家、……富裕に寄寓して一身を托するものも少からざりき。大正元年老齢を以って歿したる、夫の梅若薫の如きも、実にその一人なり。薫氏久しく梅洲氏に寄食して、始めて乏しからざるを得たり。然れども事なくして日を送るべ

からざるを以って、薫氏に謡本を書かしめ、明治十八年十一月に至りて完成するを得たり。梅洲氏乃ち之を印刷に附し、百部を限りて之を同好の士に頒ち、奥書をして小梅洲といふ。即ち小川梅洲にして氏の父なり。梅洲氏は、中川憲斎氏に学んで、書に巧なり、雅号を以って聞え、同好の士に重んぜらる。薫氏も謡曲の熟達して、謡本を頗る精良を以って聞ゆ。百部の内或は散佚し、若し坊間に顕はるる事あれば、人争って之を求む。故を以って市価極めて貴し。……

……梅洲氏は其在世の時に於て、三氏（古市公威・三井武之助・林直庸…筆者）と同門にして、謡曲の委微して振はざる時より、真摯なる研究者にして且は共にその名を競へるなり。不幸早世したるを以って、終に大成して、盛時に錚々の名を博するを得ざりしのみ。今や其名も漸く湮滅に帰せんとせり。今にして録して而して伝へずんば、誰か将た之を良くせん、……

氏（金太郎…筆者）の父又先代の観世鉄之丞氏を師とす、礼を厚うして氏をその家に聘し、大に同好の士を集めて、謡曲の普及を謀り……是れ実に明治三十年の交にして、能楽次第に勃興の機運に向へる際なり。……

氏は明治十六年の生れにして、春秋に富む。本業の発展謡曲の技能、ともに後来大に見るべきものあらむ、惟ふに父祖共にその人あり、その因って来ること、決して偶然に非らざるを知る。

資料4　『現代音楽大観』

小川金太郎　東京府下南品川浅間台一四六四　電話高輪四三三番

梅若万三郎門下の最古参者として知られて居る君は先代小川勘助氏の長男にして明治十五年十二月十五日日本橋区南茅場町四番地に呱呱の声を揚げた。家は貞享年間以来茅場町に於て代々建築材料商を営み旧幕時代は幕府の御用達を仰付けられていた由緒ある老舗である。……大正十三年父君の歿後家督を相続し勘助の名を襲ぎ現に建築材料商及び海草問屋と

して繁昌している。……父君が梅若実翁門下の愛好家であった感化を受けて君も亦幼少の頃より斯道に趣味を持ち、父君に就いて手解きを受けたが十八歳の時梅若万三郎師の門下となって正式に修行を積むこととなった。……大正十二年大震災前には乱曲の中の巻をも修めるに至って現在は師範免状を有しているが、素人愛好家にして師範免状を授与された者は頗る稀れである。（以下略）

小川家の家業を、**資料2**では染料商、**資料3**では海産物問屋、**資料4**では建築材料商とするなど様々であるが、この点は不問としたい。**資料4**に「幕府の御用達を仰付けられていた由緒ある老舗」とあるように、相当な大店であったと思われ、時により手広く様々な品物を扱っていたのであろう。

金太郎の生年も、**資料3**と**資料4**では若干の違いがあるが、これについては横山杣人編集の「能楽家過去帳（其四）[13]」に有力な情報がある。同著の昭和一三年の物故者欄に、「一二月一二日、小川勘助、五七歳。高輪研能会幹事、梅若万門下」の一項があり、この「勘助」がすなわち金太郎のことと思われるのである。数え年として逆算すると生年は明治一五（一八八二）年となる。父勘助は元治二（一八六五）年の生れであるから（**資料2**）、金太郎をもうけたのは一八才の時と、かなり弱年ではあるが、明治初期という時代を考えれば十分あり得ることだろう。従って**資料3**、**4**で金太郎の父とされている梅洲・勘助は、**資料1**の「小川勘助」と同一人物と判断して間違いないだろう。

資料3では明治三〇年ごろに梅洲が先代鉄之丞（明治四四年没の五世紅雪であろう）にも師事していたと書かれているが、後述するように梅洲は明治三四年に実から乱曲などの免状を受けているから、師家を変えたわけではなく、一貫して実の弟子であったものと判断しておく。梅洲は梅若家のパトロンであったから、鉄之丞とも親しくしていたのだろう。有力者ゆえということもあろうが、師弟関係にとらわれない自由な謡会の開催など、当時の能楽界の鷹揚で活発な状況が窺えて興味深い。

さて、『列伝』（**資料3**）から、梅洲は中川憲斎に書を

学び、憲斎の実子である梅若薫を経済的に支えていたことがわかった。「薫氏久しく梅洲氏に寄食して、始めて乏しからざるを得たり」という表現を鵜呑みにはできないが、少なくとも梅若一門内で、梅洲が薫の支援者として知られていたことが想像できるのではないだろうか。その二人の制作した謡本が「頗る精良」であるため、人々がこぞってこれを求めて「市価極めて貴し」という状態だったという。前述したように、事実その謡本は勝れて質の高いものだったのである。

　そのような良質の謡本を刊行した人物が、弱冠二一才のしかも素人であったことに驚かされる。初世実に入門してわずか三年後のことである。刊行実現には清之のある程度の関与もあったかも知れないが、四八才の梅若薫を支援して筆をとらせ、当時稀だった石版印刷を用いるなど、梅洲は財力と謡への熱意に加えて、先見性と進取の気質を備えた人物だったと思われる。明治一七年の初世実の病気見舞の催しの発起人にもなっており、若いながら率先力があったようである。しかし『列伝』刊行時の大正三年にはすでに彼は歿し、その名を忘れられつつあったようだ。没年は不明だが、遅くとも四〇代での死没と考えられ（大正三年まで生存した場合で五〇才）、『伝授免状扣』の記録では明治三四年（三七才）の〈起請文〉と乱曲〈玉取〉が最後になっている。

　更に明治三四年には清廉本、同四一年には観世清之ら刊行会による改訂謡本、同四四年には解説参考謡本と、新しく改訂、工夫された直シ入り謡本が次々に出版されて、梅洲の名前のみならず、その謡本自体も忘れられつつあったのが現実だったのだろう。『列伝』の文面には、近代初の直シ入り謡本の出版と維新期の梅若家への支援という梅洲の功績を惜しむ気持ちがありありと出ている。**資料3**で省略した部分には、この項目本来の金太郎の紹介、すなわち金太郎が幼少時から謡に馴染み、後に梅若万三郎に入門してすでに「令名高」いことなどが綴られているのだが、その分量は父梅洲の記事よりむしろ少なく、六割以上が梅洲の記事で占められている。その上金太郎への賛辞もまた「その因って来ること、決して偶然に非らざる」と、父梅洲に向けられて項目全体が締めくくられている。『列伝』のこのような編集方針につ

いては、次項で改めて触れたい。

『大観』（**資料4**）からは、一行目の「先代小川勘助氏の長男」という記述により、金太郎の父梅洲が勘助を名乗っていたことがわかる。ただし、「大正十三年父君の歿後」云々のくだりは不審だ。この一文は、大正一三年に父勘助が亡くなったので金太郎が勘助の名を継いだ、という意味に読めるが、すでに見たように梅洲は『列伝』が刊行された大正三年以前に歿しているので整合しない。単に年記を誤ったのか、没後一〇年以上経った大正一三年に名を継いだという意味なのか定かでない。

『大観』では、梅洲についても謡本についても全く言及されていない。『列伝』の編者の思いもむなしく、この頃、昭和初期には梅洲とその謡本は世間から忘れられてしまったようである。

三、素人謡曲家の記録

勘助という人物を想像する材料としてもう一つ、彼の稽古歴に注目しておきたい。「人名解説」（**資料1**）にある通り、勘助は明治一五年五月、一八才で実のもとに入門している。ただしこの場合の入門とは、今日しばしば使われるような、「ある芸事を初めて習い始める」という意味ではなく、[14] 梅若家の門人として認められることであり、すでにある程度の謡を習得していたと思われる。勘助の場合は、入門の一年後に〈勧進帳〉や〈砧〉、二年後には〈神歌〉〈恋重荷〉〈道成寺〉〈卒都婆小町〉と、かなりのペースで次々に習物を許されている。それもそのはずで、『伝授免状扣』によれば、勘助は「入門」と同じ日付で九番習謡（九番習、九番謡とも）の免状も伝受しているのである。九番習とは、〈当麻〉〈隅田川〉〈藤戸〉〈大原御幸〉〈俊寛〉〈遊行柳〉〈定家〉〈鉢木〉〈景清〉の習物九曲のことで、等級的には、この上には今述べた〈道成寺〉〈卒都婆小町〉など、現在観世流で「重習」と名付ける十数曲と乱曲を残すのみである。三浦裕子氏によれば、九番習謡の免状は当時の梅若家では「謡を稽古する弟子に最初に発行した」免状とのことで、[15] 大雑把に言えばそれ以下の、数にして一八〇曲ほどは免状を取る必要のない「平物」ということになる。つまり勘助は一八才にして平物の稽古を一通り終え九番習も許された

のである。現代では玄人の子弟以外では稀ではないだろうか。勘助がいかに幼少から熱心に稽古を積み、早熟であったかが窺える。このように技量、財力両面で師家を支える有力素人弟子が、まさに「謡曲名家」などと呼ばれ、当時の謡曲愛好者のリード役となっていたのである。

観世清之が、梅洲刊行の「百部限定」の謡本を実際は二百部頒布した由、丸岡桂に語ったことをすでに紹介した。清之はその時「小 梅洲」について何か語らなかっただろうか。もし彼が勘助の貢献を語り、丸岡が「観世流謡本出版年譜」に書き留めていたら、小川勘助の名は謡本史上に正当に位置付けられていたはずだった。が、今回梅洲について知り得たのは『謡曲名家列伝』によってであった。『列伝』の序文は、その企画の意義について、「明治大正の能楽界の事は、今日に於ては何人も之を知ると雖ども、後年に至れば……悉く其真相を糢糊の中に葬られて」しまうであろうから「後年史家が明治大正の能楽を伝へんとするに当り、其材料に供ふる」と語っているが、まさにその通りになったのである。序文ではさらに、「茲に能楽の歴史を編纂するは一朝一夕の業に非ずと雖ども」と、同書が明治大正の能楽史の編纂としてあることが強調されている。が、そこに収録された「謡曲名家」一二〇名は素人ばかりで、この時代、素人がいかに謡曲の普及に貢献したかを物語って余りある。興味深いのは、素人にもかかわらず、といった類の表現がどこにも見当たらないことである。すなわちここでは、優れた素人達が近代能楽史を担ったことは自明のことなのだ。こうした本の企画自体に、近代能楽史の様相が見て取れると言ってもよいだろう。『列伝』発刊の歴史的意味については、機会を改めて取り上げたいと思う。

大正末期から昭和初期の邦楽洋楽両分野の演奏家を集めた『大観』では、「関係者並愛好家」の部が別に設けられ、金太郎もここに置かれている。『列伝』ほど特異ではないがやはり、愛好家を受容者としてばかりではなく、音楽界の一翼を担う存在として認知していることがわかる。

おわりに

良質で画期的な謡本を刊行した梅洲という人物が一人の若い素人だったことは、少なからぬ驚きだった。が、彼の早熟で優秀な経歴を知り、また資料の端々から明治の素人達の活気を感じるにつれ、その驚きも納得のいくものとなった。彼の謡本の効力は確かに僅か一時期のものではあったが、それは彼の謡本刊行が節付改革に先鞭をつけ、その後の急速な改革を導いたからこそである。その先駆性とともに、「小 梅洲」こと小川勘助の名は謡本史の一隅に記憶されて然るべきだろう。

梅若家のパトロンとして尽力した勘助は近代の能楽復興を支えた多くの素人の典型と言えよう。勘助自身の経歴や、謡本刊行に至る具体的経緯、玄人への支援の内容や稽古の実際など、明治の能楽の実態に直結する問題について本稿では未調査で、補説と言いつつ更に課題を残すことになった。引き続き調査したい。また、入門規定と稽古階梯のあり方など能楽社会の構造の問題は、当然ながら能の目指す表現や芸術的精神にも関わるものである。近代能楽史の問題として、これら諸点の解明にも取り組んでゆきたい。

本稿執筆にあたって三浦裕子氏から数々のご教示をいただいた。また「入門」概念の変遷について、藤田隆則氏からご教示をいただいた。ここに感謝申しあげます。

注

（1）拙稿一二頁「第一章 Ⅲ 初世梅若実の節付本」。筆者は鴻山文庫蔵本（一四10）を閲覧した。なお前稿でこの本の所蔵者を「法政大学能楽研究所鴻山文庫」としたが、これは誤りで、正しくは「法政大学鴻山文庫」である。ここに訂正する。

（2）一九六五、わんや書店。

（3）一九一五、雑誌『謡曲界』に連載。『古今謡曲解題』（丸岡桂、一九八四、古今謡曲解題刊行会）に再録。

（4）『大日本書画名家大鑑』（一九七五、第一書房）、『大日本人名辞典』（一九七七、講談社）等に立項されている。『日本人名大辞典』（二〇〇一、講談社）では以下の通り。「中川憲斎。一七九一―一八六七。江戸時代後期の書家。

寛政三年生まれ。中川南山の子。江戸の人。慶応三年一月一〇日死去。七七歳。名は文彰。字（あざな）は聃卿。通称は文十郎。別号に日本書堂。著作に『憲斎』」。

（5）初代梅若実著、五六代梅若六郎・鳥越文蔵監修、梅若実日記刊行会編、二〇〇二―二〇〇三、八木書店、全七巻。

（6）『鴻山文庫蔵能楽資料解題　上』（一九九〇、法政大学能楽研究所）では、梅洲を「梅若派の玄人であろうが、不明確」としている。

（7）『能楽資料センター紀要』15～19号に五回にわたって連載された。小川勘助は同書17号、五四頁で紹介されている。

（8）『能楽資料センター紀要』26・27号に翻刻の全文が掲載され、その後『近代における能楽の伝授と受容の諸相―免状に見る梅若家と素人弟子―』（平成25～28年度ＪＳＰＳ科学研究費助成事業研究報告書。研究代表者三浦裕子）に改訂再録された。再録に際して索引、解題、論考（三浦氏）が付された。

（9）中央通信社刊『現代人名辞典』第2版を複製したもの。一九八七、日本図書センター。

（10）一九一四、能楽通信社。明治から大正にかけての一二〇名の素人の謡曲家の経歴を載せる。

（11）小川金太郎は梅若万三郎の弟子で、「人名解説」（注7）に番号籍９０４として立項されている。その後『列伝』の記事を加えて補遺がなされ、「「梅若六郎家蔵『門入性名年月扣』翻刻および人名解説」人名索引・補遺」（『能楽資料センター紀要』20号）に再掲された。

（12）一九二七、日本名鑑協会。復刻増補版として『昭和前期音楽家総覧『現代音楽大観』上・下』二〇〇八、ゆまに書房。

（13）『謡曲界』昭和一六年一二月号。油谷光雄「過去帳・近代能楽史の人々」（『能楽資料センター紀要』8号）に補綴の上再録。

（14）現在は多くの流儀で「入門」の定義が決められており、入門以前に稽古を受けることのできる曲目や入門後の稽古の階梯などが定められている。

（15）「梅若六郎家蔵『伝授免状扣』（全）解題」（『近代における能楽の伝授と受容の諸相―免状に見る梅若家と素人弟子―』一〇六頁）注8参照。

本稿は平成28～30年度ＪＳＰＳ科学研究費助成事業基盤研究（C）「能の略式演奏の歴史と現在―新しい演出形態を構想するために」（研究課題番号ＪＰ１６Ｋ０２２４５）の研究成果の一つである。